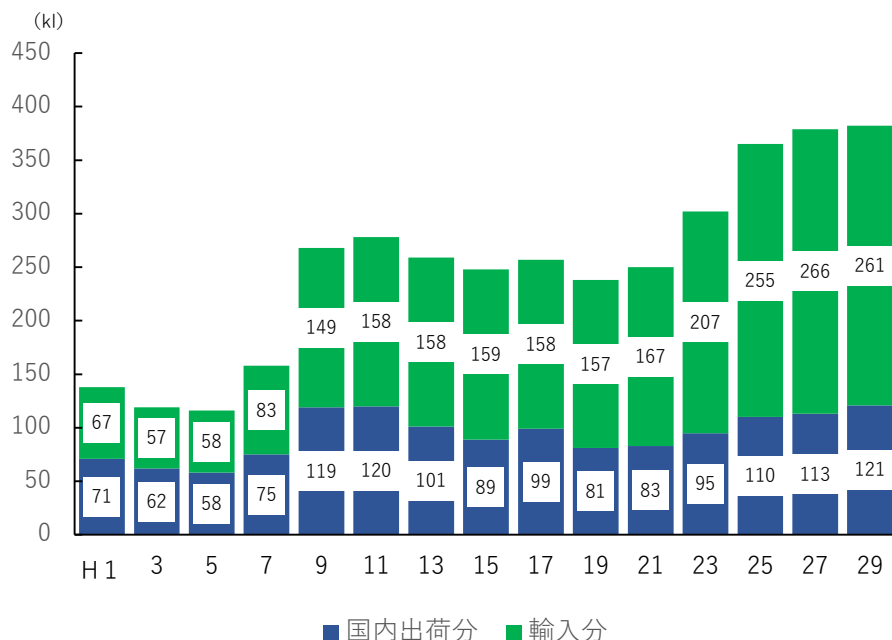


(参考5) 果実の加工動向 ② (国産ぶどう、ワインの現状)

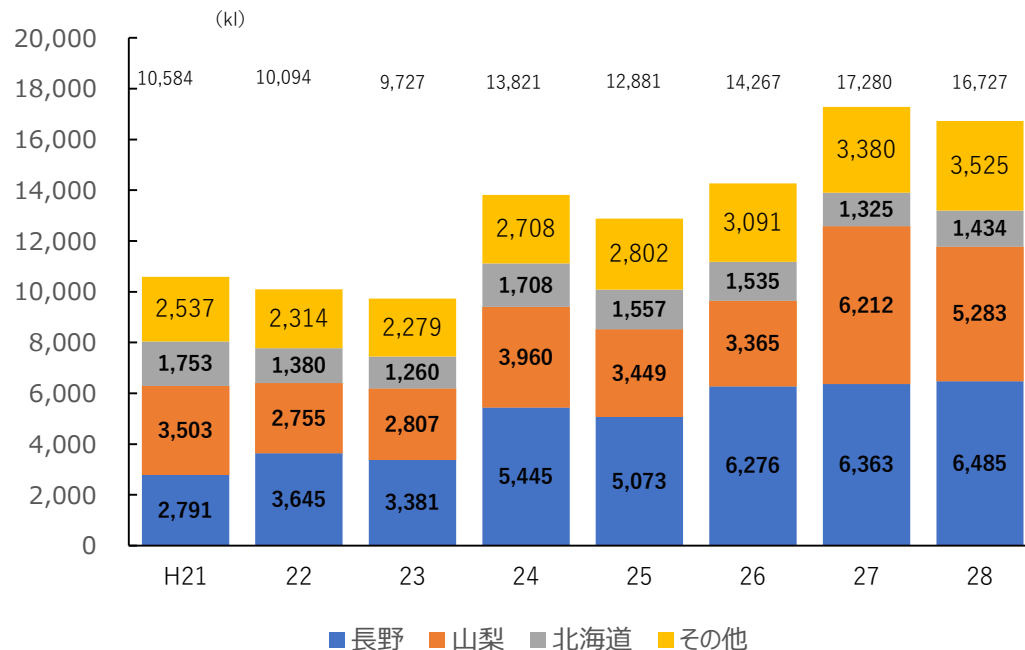
- 果実酒の出荷量については、輸入の割合は多いものの、国内出荷分も含めて増加傾向にあり、国産ぶどうの醸造用仕向け量についても、長野県、山梨県を中心に増加傾向。
- 国産ぶどうのみを原料に日本国内で製造された「日本ワイン」は、近年、品質が向上し、国際的な評価を受けるなど人気が高まっている。

○果実酒の出荷量(課税移出数量)の推移



資料：国税庁酒税課「国内製造ワインの概況」(H29年度調査分) 一部改変
注. H29の数値は速報値

○国産ぶどうの醸造用仕向け量の推移(都道府県別)

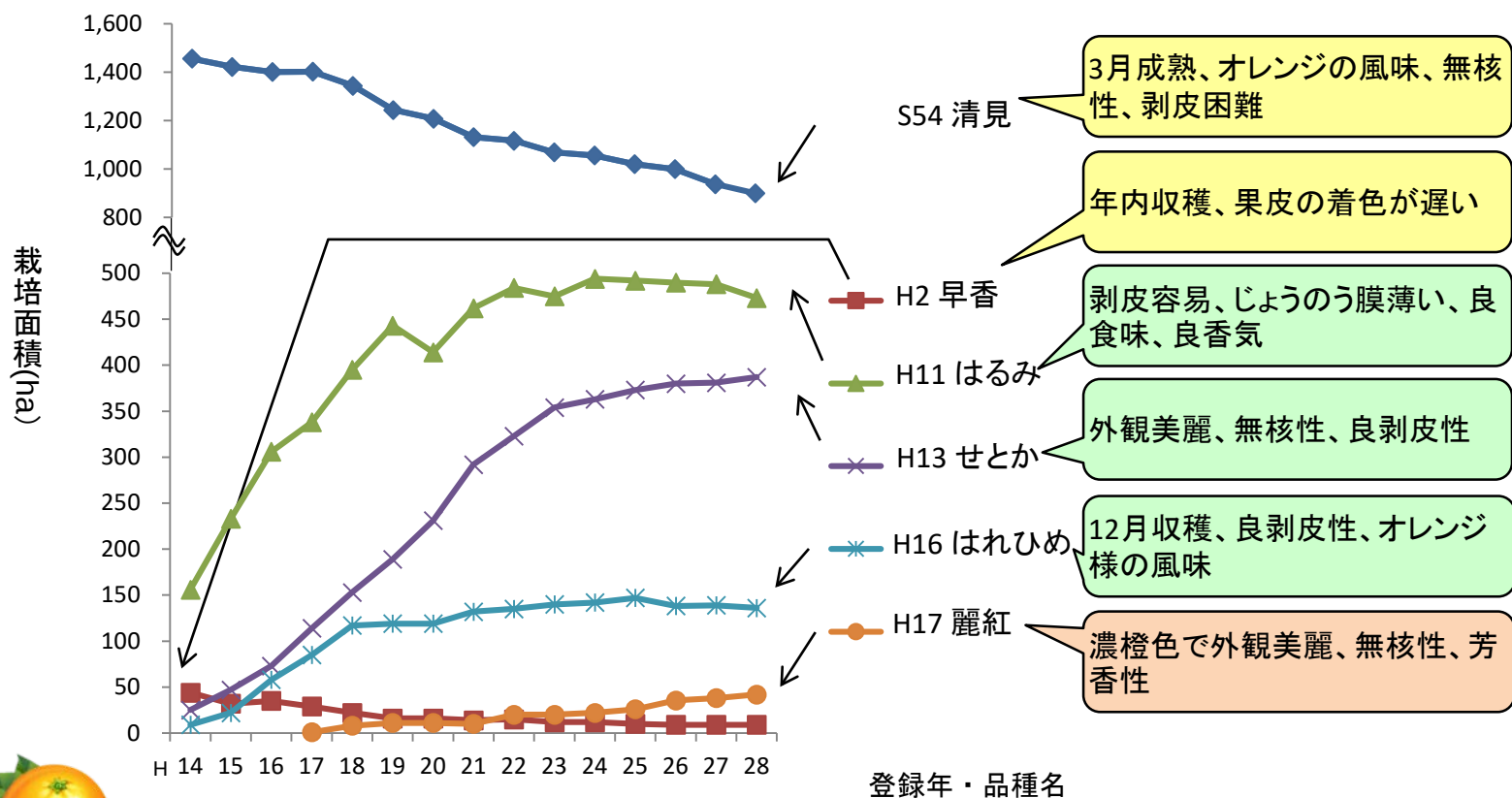


資料：農林水産省「特産果樹生産動態等調査」
注. 醸造用仕向け量は、加工場又は加工を目的とする業者に出荷するために栽培したもののうち醸造用に出荷された数量。

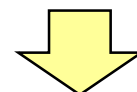
(参考6) 果樹研究の推進 ① (多様なニーズに対応した新品種の育成)

- 果樹は永年性作物であり、新品種の育成・普及に長い年月を要することから、公的研究機関が大きく貢献。
また、新品種の産地普及に際し、普及センターが精力的に活動。
- これまでも、「おいしい」、「食べやすい」などの消費者ニーズに対応した新品種が数多く育成され、主要産地に広く普及。また、近年は機能性成分高含有等の高付加価値を備えた新品種の育成に成功。
- こうした品種育成を今後とも進めることが必要。

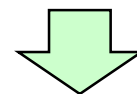
○かんきつ栽培品種の移り変わり



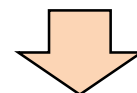
栽培の容易さ、
収量性、熟期の拡大



+ 果実品質の重視
(高糖度・良食味)



+ 食べやすさ
(剥皮性等)



+ 高付加価値

消費者ニーズに応じた
新品種を次々と育成

(参考6) 果樹研究の推進 ② (普及が進む果樹の新品種)

○ おいしい、食べやすい、健康によい等の消費者のニーズに応え、さまざまな新品種を育成。

【はるみ】

(農研機構果樹研究所育成品種)

- ・剥皮性に優れ、じょうのうが薄く、少核性で食べやすい。
- ・オレンジの風味があり、果肉が柔軟多汁。
- ・早熟性のため、栽培適地が広い。



(H13 : 84ha →
H28 : 473ha)

【シナノゴールド】

(長野県育成品種)

- ・鮮やかな黄色い果皮、高い糖度と適度な酸味が特徴。
- ・貯蔵性が高く、長期出荷が可能。
- ・ふじが出荷される前の中生種として、長野県に加え、青森県、岩手県などでも普及。



(H13:36ha →
H28:759ha)

【シャインマスカット】

(農研機構果樹研究所育成品種)

- ・皮ごと食べられる手軽さと優れた食味が特徴。
- ・ジベレリン処理で種なし栽培も容易。
- ・長野県、岡山県をはじめ、東北から九州まで広く普及し、栽培面積は過去8年間で約20倍に増加。



(H20:57ha→H28:1,196ha)

【ぽろたん】

(農研機構果樹研究所育成品種)

- ・渋皮剥皮性に極めて優れ、オーブントースターなどで加熱するだけで、簡単に渋皮を剥ける。
- ・甘みに富み、良食味。
- ・早生品種としては大果。
- ・特性を活かし、新たな需要の開拓が期待。



(H19 : 0ha →
H28 : 214ha)

【西南のひかり】

(農研機構果樹研究所育成品種)

- ・機能性成分であるβ-クリプトキサンチンをうんしゅうみかんの2倍以上含む。
- ・剥皮も容易で、高糖度、良食味。
- ・減酸が早く、年内の出荷が可能。



(H28:1.2ha)

【千雪 (あおり27)】

(青森県育成品種)

- ・切り口が変色しない特性を持つ。
- ・カットフルーツやすりおろしなどの加工向け素材として期待される。



(すりおろし)



(断面)

左 : 千雪 右 : ふじ

(H28:15ha)

【ルビーロマン】

(石川県育成品種)

- ・「巨峰」の約2倍の大粒、鮮やかな紅色が特徴。
- ・果汁が豊富で、果肉の皮離れが良く、食べやすい。

(H18:0ha→H28:18ha)



左 : ルビーロマン
中 : 巨峰
右 : デラウェア



【新甘泉】

(鳥取県育成品種)

- ・大玉・高糖度・低酸度が特徴。
- ・濃厚な甘さとみずみずしさを併せ持つ。
- ・幸水と豊水の出荷がない端境期に出荷する事が可能。



(H19 : 0ha →
H28 : 61ha)

（参考6）果樹研究の推進 ③（付加価値を高める栽培技術及び加工技術）

- さまざまな果樹の新品種等に対応し、高品質果実の安定生産を可能とする技術、機能性成分の含有量を高める栽培技術、付加価値を高める鮮度保持技術・加工技術を確立。

高品質果実の安定生産技術の開発

生産者

果実品質の改善

栽培履歴、土壌分析、光センサーによる選果データ、園地分布等の情報を登録

分析情報のフィードバック
園地別・生産者別の指導

GIS（地理情報システム）

生産者の情報を園地ごとにJAで一元管理・分析

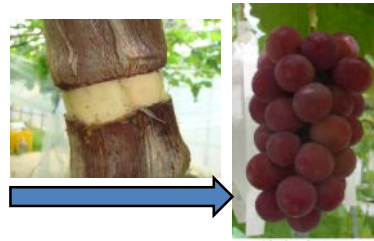
栽培情報、土壌情報、果実品質情報、ほ場情報、農地台帳等



GIS（地理情報システム）を活用したみかんの品質改善（JA三ヶ日）



着色不良果



着色良好果

ぶどうにおける環状剥皮技術による着色改善技術の普及

生果向けのみならず、加工用途にも高品質果実を低コストで安定供給する技術を開発。
高品質果実を安定供給することにより、**収入の向上と経営の安定化。**

果実の品質保持技術の開発



1-MCP処理果

無処理果

ナシの日持ち性（25℃で2週間）

果実の日持ち性を向上する、
果実鮮度保持剤
（1-MCP 燻蒸剤）処理



MA資材による
包装



軍手で
塗布

カワラヨモギ抽出物の
塗布

高品質果実の流通期間を拡大し、需要に応じた供給が可能となる。
計画的出荷を行い、**価格の安定や高単価時の販売が期待。**

新たな需要を開拓する果実の加工技術の開発



カットフルーツ製造のキーテク
ノロジーとなる剥皮技術の開発

加工向けとして供給を可能とする技術開発を行い、
果実を高付加価値化。

(参考7) 地球温暖化の影響と対策

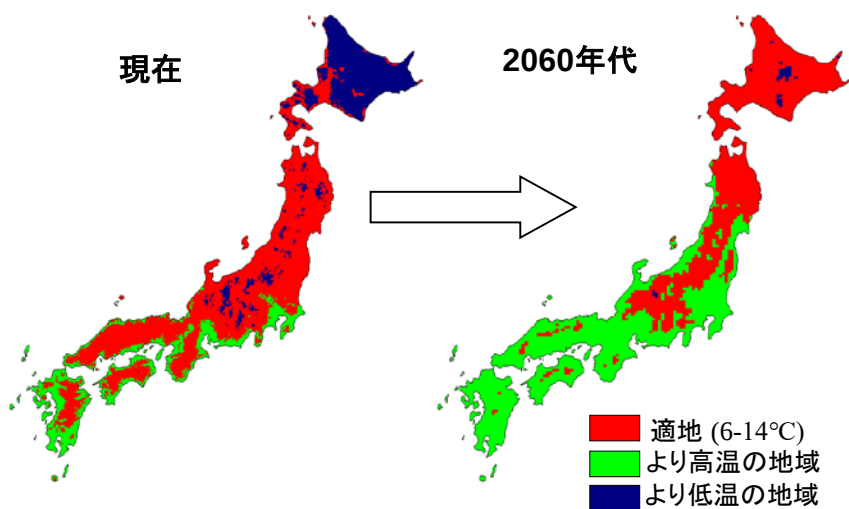
- 地球温暖化が進行する中、高温等の影響でうんしゅうみかんの浮皮、りんご・ぶどうの着色不良、なしの発芽不良等の障害が発生。
- また、うんしゅうみかんやりんごは、気候変動により栽培に有利な温度帯が年次を追うごとに北上するとの予測。
- このような温暖化等の気候変動による様々な影響に対する取組を計画的かつ総合的に推進するため、政府は「気候変動の影響への適応計画」を平成27年11月に策定。
- 計画に即し、適応技術の開発・普及、優良着色系品種等への転換等の対策を推進。

○「気候変動の影響への適応計画」(平成27年11月27日閣議決定)の概要<果樹>

○IPCC(気候変動に関する政府間パネル) 第5次評価報告書(2014年公表)

- ・1880～2012年において、世界平均地上気温は0.85℃上昇
- ・最近30年の各10年間の世界平均地上気温は、1850年以降のどの10年間よりも高温

○栽培適地の移動予測モデル(りんご:2002年公表)



(資料:農研機構調べ)

影響	[現状]	
	○ うんしゅうみかんの浮皮、日焼け等 ○ りんごやぶどうの着色不良・着色遅延 ○ 日本なしの発芽不良、みつ症 等	うんしゅうみかんの浮皮 りんご着色期の平均気温の違いが果実の着色に及ぼす影響 ぶどうの着色不良 日本なしの発芽不良 日本なしのみつ症
取組	高温対策	みかん ・中晩柑への転換 ・カルシウム剤の活用(浮皮)、フィガロン散布の普及(着色不良) ・ジベレリン・プロヒドロジャスモン混用散布(浮皮)、遮光資材の積極的活用(日焼け)等による栽培管理技術の普及を加速化 ・高温条件に適応する育種素材の開発(2019年目途)
		りんご ・「秋映」等の優良着色系品種の導入 ・かん水(日焼け)や反射シート(着色不良)の導入 ・標高差を活用した栽培実証等の取組を推進 ・高温条件に適応する育種素材の開発(2019年目途)
		ぶどう ・「クイーンニーナ」等の優良着色系品種や「シャインマスカット」等の黄緑系品種の導入 ・環状剥皮等の普及を加速化(着色不良)
		なし ・発芽不良軽減のため発芽促進剤の利用等技術対策の導入・普及 ・高温条件に適応する育種素材の開発(2019年目途)
	機会の活用	(亜熱帯・熱帯果樹) ・アテモヤ、アボカド、マンゴー、ライチ等の導入実証の取組を推進